

今週には夏至を迎えます。早くも一年の折り返し地点になりました。蒸し暑い梅雨の季節ですが、色とりどりの紫陽花の花や、雨上がりにかかる虹のように、神様の祝福を心にいつも覚えて歩むことができるなら、きっと幸いな毎日となるでしょう。

六月は、肉体的に負担がかかるだけでなく、木群の教会にとっては、精神的にも弾圧という重い歴史を振り返る月です。しかし、このいわばブレーキがかけられたような時間は、私たちの信仰生活にとって、決してマイナスではなく、むしろ必要な時間なのだということを、心にとめましょう。

病気や怪我をした時、投薬や手術は必要ですが、一番の治療はなんといっても休み、栄養をつけ、そしてリハビリに励むことです。無理やり栄養剤などで、不規則な生活を続けていても、それは本来のその人の姿とは言えないような気がします。立ち止まる時間があると、その人自身が持つ回復力が働き、以前のように、あるいは以前よりもさらに強く、癒されることがおこります。逆さまのようですが、つまずきが、かえって恵みになるのです。人生に立ち止まる時間は、むしろ必要なことであり、より恵まれた歩みを進めるために、回復の期間となるのです。

「四重の福音」というホーリネス信仰の三番目「神癒」が今朝のテーマです。「新生」が「生まれた時に受ける喜びと祝福」、「聖化」が「成長する実感から受ける恵みと喜び」とするなら、「神癒」は「つまずきからの回復の信仰」と言えるでしょう。そして来週は「再臨」「帰りを待っている人がいる幸いと平安」で完成です。人間は、本当は母親の胎内から生まれるように、霊も新しく生まれることが必要なのだと聖書は教えています。そして、肉体に病気や怪我があるように、見えない霊の部分にも、迫害や苦痛、行き詰まりがあります。それは、放っておけば、最後は絶望となり、魂が死んでしまうとキルケゴールは言いました。しかし、そこに必要な手当てをし、リカバリー（回復、取り戻すの意味）の時間とするなら、再びその人の霊には喜びと命が満ちて、神の愛をより確かに握ることができるようになるのです。

今朝の聖書の箇所は、8年ほど前の木誌の特集で選ばれた御言葉です。パウロが、幻の中でイエス様に会った経験が、心震えるほどの大きな喜びであったことがわかります。大きな苦痛が彼を襲いましたが、むしろそのことで、神の愛の大きさを実感し、その証しとなるなら、自分の弱さは誇りだとパウロは嬉しそうに叫んでいます。

立ち止まる時間は、必要な時間です。けれど、その意味がわからなければ、誰もその苦痛と真っ白な時間に耐えられず、何かで紛らわしたくなるでしょう。回復の信仰が、私たちを励ましているのは、躓きが恵みになる、大切な経験だからなのです。